

## 問わず語りの 人間力原論

高見大介



### 恩返しより恩贈り

朝晩が幾分、過ごしやすくなった。とはいっても日中はまだまだ暑いのはあるが。夕方にはセミの鳴き声から鈴虫やコオロギに変わり始めている。空の色や空気のおいもすっかり秋で、何だかうれしい。

なぜなら僕は、この季節が大好きだから。僕の故郷ではこの

時季になると、秋の収穫祭の準備で街は大忙し。集会場や神社では地域の大人が子どもたちにおはやしや太鼓を教えてくれる。

もちろん僕も毎年それを楽しみに参加して太鼓を教わったのだが、今考えてみると教わったのは太鼓やおはやしだけではなかった気がする。街の歴史はもちろんだが、異年齢で多様な人々と関わることで学校では体験できない人間関係や人の優しさに触れ、子どもなりに地域の住民として多くを学んだ。そして何より、お祭りの重要な一員として必要とされる経験が、何だか一人前になれた気がしてうれ

しかったのをよく覚えている。

あれから30年以上たった今でも、当時の子どもたちが地域の大人として子どもたちを育てていると考えると、なんとも感慨深い。今、故郷を遠く離れ大分で暮らしている身の僕としてはうれしい反面、故郷に恩返しが出来ていないことに寂しさを感じたのだが。

先日、僕の関わる「大分県少年の船」の会議で、ある青年の話聞いた。地域の子も会で大切に育てられ、少年の船で子どもたちのために活動している杵築市の青年が、地域のお祭り「立石楽」を復活させようと動き出しているという。そして毎

晩のように子どもたちを集め、太鼓やおはやしの練習をしているというではないか。

日本全国で、このような恩贈りの営みが無数にあるのだろう。そしてこの営みこそわれわれが今、最も大切にすべき人間らしさあふれる地域活動なのかもしれない。そんなことを思いながら、そのお祭りに出かけよう。本番は9月24日、杵築市山香町の立石地区コミュニティセンターだ。

---

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。41歳。